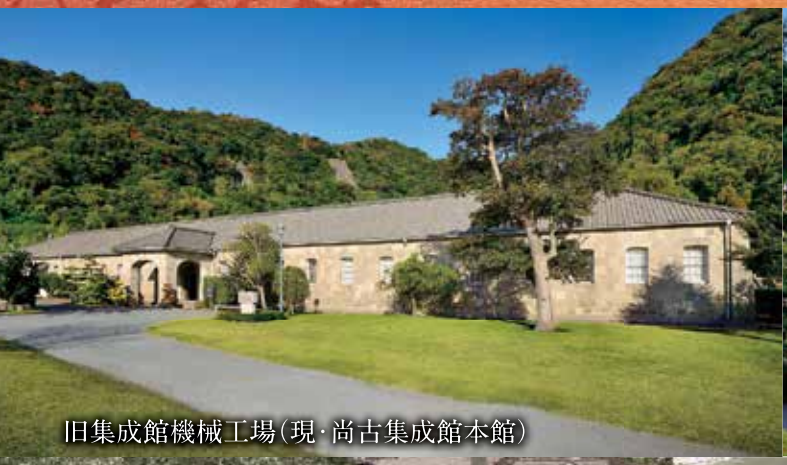
世界文化遺産登録５周年

明治日本の産業革命遺産

～「産業国家」日本の原点 鹿児島～



旧集成館機械工場（現・尚古集成館本館）

旧鹿児島紡績所技師館（異人館）

150年前の磯地区（CG復元図）

第3回 集成館事業再興・全国へ伝播した薩摩の技術（集成館事業第二期）

１８６３年の薩英戦争で欧米列強との圧倒的な力の差を感じた薩摩藩は、島津斉彬の唱えた近代化の重要性に改めて気づき、斉彬の死後、大幅に縮小していた集成館事業の再興に取り組みます。

薩摩藩は、イギリスに留学生を派遣して西洋の進んだ技術や知識を積極的に吸収するとともに、西洋から優れた機械を直接購入して近代化を加速させていくことになります。

現在の旧集成館機械工場は、薩英戦争後に、斉彬の意思を継いだ藩主忠義（ただよし）が１８６５年に建築したものであり、現存する日本最古の洋式機械工場として、私たちに往時の姿を伝えています。

薩摩藩英国留学生（尚古集成館蔵）

１８６７年には、日本初の洋式紡績工場である鹿児島紡績所が完成。イギリス人技師が滞在するための宿舎（旧鹿児島紡績所技師館）も完成し、技師たちは職工の技術指導にあたりました。

明治になり、その技術と知識はやがて、富岡製糸場（平成26年世界遺産登録）など、全国の紡績工場に広まっていきました。

斉彬の「富国強兵」・「殖産興業」のコンセプトと、その下に育まれた製鉄や紡績などの技術は、日本の近代化に大きな役割を果たしていきました。

関連情報 おうちでも世界文化遺産を楽しもう！

明治日本の産業革命遺産
解説動画
「日本近代化発祥の地・鹿児島」

動画はこちらから

インフルエンサーと一緒に
楽しく学べる動画
「明治日本の産業革命遺産inかごしま」Vol.2